

第6回日本認知症予防学会学術集会 発表

題名；食成分による認知症進行抑制効果に対する観察評価と重症度・認知機能評価の検討

氏名；折原由希子¹⁾、野坂直久¹⁾、吉田歌子²⁾、小野准³⁾、菅野恵美子⁴⁾、渡邊慎二¹⁾、加藤一彦⁵⁾

所属；¹⁾日清オイリオグループ株式会社、²⁾NPO 法人ぐる一ぶ麦、³⁾金谷栄養研究所、⁴⁾株式会社天柳、⁵⁾医療法人社団彦仁会かとうクリニック

【目的】

認知症進行抑制を目的に、食成分由来のケトン体供給による脳内エネルギー代謝低下抑制が検討され、肝臓で容易にケトン体に変換される中鎖脂肪酸 (MCF) が注目されている。MCF 摂取後の認知機能改善効果が報告されているが、臨床報告は多くない。そこで、本研究では認知症患者への影響を観察評価と重症度・認知機能評価との組み合わせで検討した。

【方法】

若年性を含む認知症患者 10 名を対象に 15～20 g を 3 ヶ月間摂取させ、施設介護者、家族から観察評価を得た。加えて、N 式老年者用精神状態評価尺度 [NMS] (A 特養施設 3 名)、改定長谷川式簡易知能評価スケール [HDS-R] (B 通所介護施設 3 名)、タッチパネル式認知機能テスト [TDAS、日本光電社製 MSP-1100] (C 通所介護施設 4 名) による評価を行った。

【結果】

観察評価から発語・積極性・交流の増加、ゲーム参加拒否・妄想発言・帰宅願望の低下等の変化を 3 施設に共通して認めた。さらに NMS の「記銘・記憶、見当職」で 2 名、HDS-R の「場所見当職、計算、物品記銘」で 3 名、TDAS の「単語再認」で 4 名に改善が認められた。A 特養施設の 1 名は氏名を自記できるようになった。

【考察】

MCF 摂取後に観察評価で改善が認められ、間接的重症度評価、直接的認知機能評価のいずれかでも改善を認めたことから、MCF 摂取は認知症に好ましい影響を与えることが示唆された。今後、認知症の症状や重症度に応じた評価系を組み合わせ、栄養状態を維持しながら長期的に評価するなど、更なる検討が必要と考える。